

平成24年度第1回北区まちづくり協議会全体会
語り部との座談 グループA 鴻巣講師

重複した言葉遣いや、明らかな言い直しのあったもの、わかりづらい表現などは、整理した上で作成しています。

司会（渡邊新琴似西まちづくりセンター所長）

それでは、始めさせていただきたいと思います。

私は、Aグループの進行役を務めさせていただきます新琴似西まちづくりセンターの渡邊でございます。

それでは、早速、座談に入りたいと思います。

こちらのグループで、みずからの震災の体験をお話しいただきます語り部は、ガイドサークル汐風の鴻巣修治さんです。

鴻巣さんのプロフィールを簡単にご紹介します。

現在、ガイドサークル汐風の代表でございまして、団地のリーダーとしても活躍されている方です。地域リーダーとして、避難者のお世話はもちろんですが、避難物資の搬入、警備、避難所の運営等にご尽力されてきております。団地内の助け合いがあつてこそ、一番大切な時期を乗り越えることができたという実体験から、地域のきずなの重要性を伝える活動を続けていらっしゃいます。

それでは、Aグループの皆様から、簡単に自己紹介をしていただきます。

【自己紹介】

鴻巣講師

それでは、私実際に団地での活動をお話させていただいて、私どもが経験したこと、それから、これは大事だなと思ったところを中心にお話し申し上げます。

今住んでいるところは、山間の53世帯くらいの団地です。まちから3キロくらい離れたところの坂をずっと上っていきまして、本当に車でなければいろいろな用を足せないところです。

地震と津波が発生した時点では、ライフラインは全部ストップしましたので、情報入手の手段は、携帯ラジオだけなのですが、携帯ラジオを聞いても、大都市のニュースしか入ってこない状態で、私たちは当初、何が起きているのか全く知りませんでした。夕方になって、被災した方が、私たちの住む団地の方に、青い顔をして上ってきたのです。そこで初めて、私の住んでいる地区、旧歌津町の様子を知ることができました。旧歌津町と志津川のまちもみんな壊滅だということでした。

国道は全部寸断で、ガソリンスタンドも全部なく、初めは私どもは茫然としていま



したが、発生から1日、2日たって、皆さん行動し始めるのです。何をしたのかといえますと、ガソリンを求めてまちの方に買い出しに行ったのです。そうしたことが3日から4日続きましたね。そのうち、ガソリンが底をついてしまったのです。それから、区長（地区の長）さんに相談しようということで会いに行きましたが、なかなか会えませんでした。区長さんは、区長という仕事のほかにもう一つ、消防団の仕事を抱えていたのです。だから、優先することは遺体捜索なのです。やっと連絡がとれて、会いましたら、自分たちで救援をしてくれとはっきり言われました。しかし、そういうふうにはっきり言われたことで、私どもは気持ちが吹っ切れまして、団地の班長さんたちと遺体安置、物資搬入のルート確保、物資の集積場所、臨時事務所開設などについて相談をしました。

国道は二つあったのですが、一つは浜辺を走っているのが完全に寸断されていて、もう一つの国道からしか物資が入ってきませんでした。ですが、そのルートだけでは不足が生じたので、急いで自衛隊の方々に仮の橋をかけていただき、ルートを確保しました。

また、搬入された物資の保管ということで倉庫を借りました。それから、臨時の事務所を借りたわけです。ところが、被災された方が多数団地の避難所に来まして、最終的には、団地の人口が3倍に膨れました。このため、当然、物資が不足し、毛布、布団なども足りない状況となりました。

そこで、いろいろな役目を決めたのです。それは何かというと、物資補給が一つです。それから、給水部です。それから、ライフラインはだめで、水洗トイレが使えませんかから、トイレ部です。それから、塵芥車も来ませんから、ごみ係です。

これは意外だったのですが、隣の町から傷害事件の話が聞こえてきたことがありました。原因は、物資の分配の不満が発火点だったそうです。それで、これは慎重にやらなければならないと思い、自警団を結成しました。また、全国の知らないナンバーが団地の中をかなり走っていて、これは、警備上もよろしくないということで、この問題に対しても自警団を結成しました。

次の問題は、こんなに大勢に膨れ上がった住民をどうしようかということでした。そして、物は公平に慎重に配らなければいけません。婦人部の方は団地に四十数名いるのですが、この方たちに、特に物資の補給にかかわっていただきました。

給水は、新潟水道局が内陸部まで来ていただいていたのですが、国道がまだ片づかないため、タンク車そのものが来ないのです。それで、皆さんは洗濯などに非常に困りました。皆さん、山の川上に車で行きまして、そこで洗濯をしていました。

水は、リレー式で団地に届き、一つの大きな黄色いタンクに貯蔵していただきました。ただし、皆さんに均等に分けるため、正副の係を設け、必ず、給水は1日何回というふうに分けて立ち合いをしました。

トイレは、団地の周りに穴を掘りました。これはしょうがないですが、本当にティッシュだらけになりました。

生ごみも、週に何回というふうに立札を立てて、穴を掘りました。これも、週に2回なら2回と時間を決めまして、立会人を置きました。これは正副の係を置きましたので、交代でできるようにしました。

このようなことを、一覧表にして、責任者をきちっと決めました。

物資の補給は私がやらせていただきました。ただし、中学校までは大体2キロくらいあるのですが、ガソリンがないのですね。後からやっと、町からガソリン券が出ましたが、これは、震災があって、2週間くらいたってからです。その間はどうかというと、リアカーなんて便利なものはありません。しょうがないので、手押し車、一輪車ですが、あれにロープをつけまして、団地の若い者8人くらいが、交替制で物資の補給をやりました。

水と米など、その日必要となるもの、今不足しているものなどについては、婦人部が毎日伝票をつくってくれました。私はこれを毎朝受け取り、物資の補給をやりました。この伝票は、後で非常に助かりました。

そんなこんなで、2週間近くになって、やっとガソリンが支給になりまして、それからは物をスムーズに運べるようになりました。

物資は、倉庫の前にブルーシートを敷き、そこに名前を書いておき、時間を決めて取りに来てもらいました。

そのうち、東北福祉大学の先生が来て、研修会をやるというのでお話を聞きに行きましたが、その話を聞いて、反省させられたことがあります。それは、物資を取りに来てくれと言うのは間違っているということです。つまり、こちらから届けに行くと、皆さんの家庭の状況も確認できるということです。これは非常に反省しました。

講師の先生がおっしゃったのは、こういうことです。

要点だけですが、助けるということに、公助、共助、自助がありますが、これに、「がけ」が大切だというわけです。つまり、自助のレベルの「がけ」は、防災グッズの準備や地震で倒れないようにしておくなど、皆さん一人一人の「心がけ」というもので、これが大切ですよと教えられたのです。そして、同じ「がけ」でも、共助のレベルの「がけ」は、隣近所への「声かけ」だということです。

私どもは、この「声かけ」の大切さをわかっていなかったのです。今まで、物資は取りに来ていと言っていたのですが、この反省で、届けることにしました。

また、先生がおっしゃるには、地域の皆さんの状況をつかむには、地域の団体を通じて情報をつかむことなのです。つまり、自治会などの団体は、日頃からいろいろなレクリエーション活動を行っていますが、そういった場での情報が大事だということです。これは、なるほどと思いました。社会的弱者、つまり高齢者や障がい者の方に関しても、自分たちの周りにどのくらいいるのかの情報も、レクリエーションやいろいろな会合、地域の集まりでつかんでおくことが大事なのです。これは、私も非常に反省しました。

それと、意外と東北の方は遠慮がちなのですよ。助けてくれと直接言えないところがあるのですね。遠回りで、やっと私の耳に入ってくるのです。それは、私どもも反省させられました。遠慮なく言える環境を日ごろからつくっておくことが大事だと言われました。

もう一つは、一般住民です。つまり、これこそ隣近所の声かけでございます。隣近所に寝たきりの方がいないか、体の不自由な方、あるいは妊婦の方、あるいは、小さい子どもさんですね。これは、声かけから始まるのです。

私は、団地に二十数年いるのですが、反省させられたのは、会合では一部の人しか会っていないのです。ですから、一部のことしかわかっていないのです。私はすべ

てわかっていたとっていたのですが、こういう惨事になったときには、意外とわからないものでした。

あと、私どものところは、遠洋漁業でご主人さんが出漁中の方が多いのです。ですから、いかに声かけをしてあいさつをするか、これは大事だと思います。

あいさつというのは、友好を深めることにもなりますし、コミュニケーションの手始めとしても大切です。

そして、最終的にはリーダーの判断があると思います。まちの中にはいろいろな建物が残っており、私どもは語り部としてこの建物ごとの教訓を何度も話すのです。そうすると、共通のことが出てくるのです。この建物の中で一人の犠牲者も出さなかったということは、その現場にいるリーダーの判断一つなのです。

ある建物は、営業部長がそのリーダーで、この方は、自分のところの建物の構造を知っていたのです。その日は、高齢者の芸能大会をやっていて、300名から400名の方がいました。地震が来たとき、一部の方は、自分の子らと一緒に逃げたのです。結果的に、その方たちは犠牲になりました。営業部長さんは、いち早く玄関に降りてきて、「生きたかったら、ここから出るな。」と、とおせんぼをしたのです。そして、従業員を下ろして、一緒に手と手をつないでとおせんぼをしたのです。そうしたら、皆さんは、すごすごと戻っていったのです。催しものは3階でやっていましたが、これも4階に避難させました。そして、津波はその後、流木などとともに、ガラス窓にどんと押し寄せ、今まで芸能大会をやっていた3階まで入ってきたのです。4階の一部も浸水したのですが、全部窓を閉め切りました。窓を閉め切ると、トイレの問題などもあり、心筋梗塞状態になったお年寄りもいます。ところが、何とか頑張りと言って、明け方の救助までもたせたのです。

その建物の国道をはさんで向かいが病院なのですが、4階の窓から先生はいないかと、何十回も叫んだのらしいです。やっと聞こえて、先生と看護師さん2名が来たのです。先生がどうしたのかと聞き、こういうわけで窓を閉め切っていたら心筋梗塞状態になったということを説明したところ、寒いのは我慢して窓を全部あけるということです。1時間20分くらいでしょうか、寒いのを我慢していたら、脈が正常に戻ったのです。後に、とおせんぼをした営業部長さんに、あの時何でとおせんぼをしたのかと聞きました。そうしたら、自分はこのビルを建てる時の設計に立ち会っていたので、どれくらいの地震、津波に耐えられるのか頭に入っていて確信があったということです。まさに、現場のリーダーの判断かなと思いました。

渡邊所長

とてもリアルな話で、大変参考になったと思います。

せっかくの機会でございますので、ご質問等をいただければと思います。

会員

869年の貞観地震から大きなものが来ています。それで、デスクワークになるのですけれども、組織体制というのはつくっていたのでしょうか。

鴻巣講師

私どもは、近代100年の中で忘れられない地震があります。それは、明治29年の三陸巨大津波です。これは、旧暦で6月15日、新暦で言うと5月5日です。マグニチュード8.7で、津波の高さは約30メートルです。このときは、青森、岩手、宮城で2万7,121名の方が犠牲になっております。

それから、昭和8年の三陸巨大津波です。これは、3県で約3,000名の方が犠牲になったのです。流出した船が3県で5,980隻です。これは、3月3日、午前2時ころです。東北の3月3日といたら、かなり寒いです。

それから、最も忘れられないのは、チリ地震津波です。これは、昭和35年です。まちの地震、津波の基準はチリ地震津波です。結果的に、今回の大惨事を受けまして、感情的には、何で明治とか昭和の地震、津波を基準にしなかったのかと思っています。

会員

あの防波堤は、チリ地震津波を基準にして使っていたのでしょうか。

鴻巣講師

そうです。チリ地震なのです。すべてチリ地震の基準でなされているわけです。

でも、ある一面から申しますと、これはやむを得ないことなのです。皆さんご存じのように、明治・大正時代の物理学者で、寺田寅彦先生がいますね。天災は忘れたころにやってくると言った人です。つまり、人間にとって、記憶という問題が横たわるわけです。

では、チリ地震津波の状況はどうだったかと言いますと、うろ覚えなのですが、まず、印象に残っているのは、1日じゅうの津波です。地震がないのに、何で津波のアナウンスがあるのだという話です。津波は地球の裏側に到達するのに相当な時間がかかるのです。そして、湾が、みるみるうちに、湧き水が湧くように、ぶわっと膨れ上がってきたのです。そして、海水がまちの中に入ってきました。これが1日じゅう続くわけです。到達する時間が遅いですからね。これで、41名の方が亡くなったのです。これは、行政、町民に一番印象に残っているのです。

ただし、私たちにちょいちょい耳に入っていたことがあるのです。それは、町あるいは村の古老、それから、おじいさん、ひいおじいさん、おばあさんが、津波が来たらば、てんでんこで逃げろよと。これは、後で私が調べましたら、ものすごい哲学がありました。それは省略しますが、昔のお年寄りの人は、それしか言わなかった。つまり、この方たちは、明治29年、昭和8年から、言い伝えてそれを引き継いでいる方がいるわけです。明治29年という、今から数えて120年近く前でしょうか。昭和8年ですと七十数年前です。

だから、古老などの話は、決してばかにしてはダメなのです。大反省です、今回は。



おまえたちのような厄介者（津波）が、我々人間の世界に入ってくれるな、だから10メートルの堤防をつくるぞ、この発想ですね。これは、私は、おごりだと思いませんね。その奥にあるものは、人知に及ばないということですよ。むしろ、自然と共生する、ともに生きる、この発想がないとだめだと思えます。つまり、物でストップする、これはハードな防災対策と言われると思えます。でも、先ほど言いましたように、私どもの団地の例、あるいは、昔の人の言い伝え、こういった意味の防災対策は、ハードに対してソフトでございます。減災を達成するためには、私は、ソフトの防災教育を今後は主流にしなければいけないと思えますね。

私どもガイドサークルは、犠牲になられた1,000名近くの方たちの死をむだにしたくないのです。これは、100%は無理かと思えますけれども、そのためには、言い伝えていくということですね。これは、一生かかって、後継育成をしながらやっていかなければならない、それが仕事だと思っています。

会員

私どもも、大変大きな震災で、万が一のときに、日ごろからどのようなことを考えていたらいいのか、その中で、よく言われているのは減災です。この減災の取り組みに必要なことは、どんなことがあるのでしょうか。

鴻巣講師

ずばり言いまして、昔の言い伝えを決してばかにしてはいけないということです。

それから、もう一つ気づいたことがあります。縄文時代、弥生時代の遺跡、鎌倉時代の碑文、江戸時代のお墓、あとは神社仏閣の大体6割くらい、こういった建物は無事なんですよ。高台から動かなかったのです。これが何を意味しているかということ、いかに三陸地方が津波の歴史の宿命的な土地だったかということだと思えます。つまり、後世に残しておきたいものは、すべて高台にあるのです。津波被害に遭っていないところにあるのですよ。これは、私どもは非常にショックを受けました。これは、大事なものを伝えている、無言の警告だなというふうに私どもは受け取りました。これも、ソフトで減災につながるということであると思えます。

会員

今、先生からお話がありまして、私もちょっと調べてみました。三陸沖というのは、明治29年、1896年の明治三陸沖地震、昭和8年、1933年の昭和三陸沖地震ということで、1,000年に一遍と言われていることでもあります。昭和8年の昭和三陸沖津波の後、宮城県では、海嘯罹災地建築取締規則というものを制定しまして、津波の危険のある低いところの建築を禁止した。それで、住宅建築は知事の認可が必要とし、倉庫、工場を建てる場合には、非住家、ここに住んでは危険ですという表示を義務づけた。こういう歴史があるのですね。

それで、今はどうかということ、この地域に民家がびっちり建っています。たまたま、今回の津波は1,000年に一度と言われていますが、記録的な猛威をふるったと言えるのは、同じ津波の規模で、貞観11年といえますから、869年、1,200年前ですね。貞観11年に貞観津波というものがありまして、古文書とか、地質学者、

地震学の専門家は、皆、これを知っているということですが、この教訓が全く生かされていないというのが、まことに残念なことです。

私たちは、1,000年に一度だから地球がくしゃみをした程度だろうというような捉え方をし過ぎていたのではないのでしょうか。たとえ、1,000年に一度であっても、何らかの形で対策をする必要があったのではないかと。そう言った意味では、私個人として、天災ではあるけれども、人災に等しいのではないかと考えています。

それから、ソフト面では、基本はまず逃げることを学べということです。逃げる主体は自分であり、人のことは構うなというのが防災のソフト面の訓練の骨子であるとも言われています。犠牲者がゼロだったという有名な釜石中学校がありますが、ここは、日頃からずっとそういう訓練をされていたということです。一方で、低い所に逃げろと指示をして全滅をした学校もあります。ですから、指導者、リーダーの方がどういう判断をされるか、これに密にかかわっていると思います。リーダー研修会がいかに大事か、繰り返し、繰り返しやっていくことが大事だと思います。

私どもも、今年、北区の総合防災訓練で、鉄西連合町内会と幌北連合町内会と合同でやることになりました。図上訓練とか避難所の訓練とかいろいろなことをやっていますが、やはり、リーダーの教育がいかに大事かということをしみじみ感じています。

今日の研修会を通して、このことを皆さんにお伝えしながら、本当に一人一人がリーダーになっていけるような、そんな体制をとっていきたいと思っております。

会員

私どもの地域は、海拔4メートルと低いところで、高いところはありません。したがって、津波警報が出て、津波が来るまでに20分あったときに、より早く、より遠く、より高く逃げるとというのが一つの基準になっています。

そこで、逃げる際に、もちろん要援護者、弱者がいるわけですから、車を考えてしまうのですが、車は置いていけよという指導です。車は全く使えない状況になるのですね。

鴻巣講師

とにかく、その規模にもよりますが、ライフラインがストップするという状態になったときは、国道は走れないと思った方がいいです。なぜかというと、信号がきかないからです。そして、まちにいた方が自宅に帰って、裏山に逃げるという時間もない方がいるわけです。渋滞になりますから、まちの中心部にいた方はほとんど車を捨てました。

車の被災状況を集めているのですが、みんな、だんご状態です。あれを見たら、津波のエネルギーというものは、本当にぞっとしますよ。むしろ、車から離れた方がいいです。

会員

私は、民生委員をやっている者ですが、テレビで最初に見たときに、まず思ったのは、民生委員は避難所のどこにいるのだらうということです。私たちも、もしそうなったときには、民生委員もまずそこへ行って、ひとり暮らしの人とか、いろいろな人

たちの状況を確認しなければならない、そして、援助をしていかなければならないという仕事があるものですから、ついついそういう場面で見ってしまったのですが、見当たりませんでした。

後で状況がわかったのですが、民生委員は、まず自分の安全を確保しますね。それから、ひとり暮らしの方、障がいのある方がどうしているかなということで、そこに行った段階で津波に遭って、民生委員が亡くなっているという例が結構多かったのです。それを聞いたときに、もし自分がそういう状況になったら、何ができるだろうというふうに考えたのですね。

私たちは、ふだんから、ひとり暮らしの方を訪問しています。障がい者の方も見ています。そして、いざ、そのように見たときに、自分一人ではできないので、私の民児協では、複数の方が、連絡を取り合って1人を助けるという形でやろうという話をしているのです。でも、実際にそうなったときに、南三陸町では、実際に民生委員の方はどういう状況で行動をとっていたのだろうかというところを非常に知りたいと思っています。

鴻巣講師

私の場合は、高台にいたのです。津波がどの程度かもわかりません。そういう場所にいたからこそ、こういう話もできるのですね。恐らく、今おっしゃったとおりだと思います。

そこで、参考になるかどうかわかりませんが、四つの地区がある中で、三つの地区は海岸線にある地区です。これは壊滅です。たった1地区だけ残ったのです。それは、内陸の入谷地区という山の方なのです。ここの地区は、昔から津波を恐れて、それにちなんだ地名があるほどです。しかし、今回、ここ1カ所だけが被害を免れたのです。まちの中核部は全く機能しませんでした。ここの地区の消防団が残っていたわけです。ここの消防団が責任をもって、救出に行ったのですね。

私は、ここの副団長さんにいろいろ話を聞いたのですが、都会と山間の村では違いがあると思いますけれども、高台の集会所、人の集まるところに、いち早く、みんなを集めたと言うのです。そうすると、集まった人は、安心するのです。自分は、消防団長という役柄上、みんなの状況を知りたいわけですね。そうすると、皆さん集まっているから、情報も集まるというわけです。

それから、いろいろな物資関係ですね。私のところは田舎ですから、都会と違って、トイレがなければ掘ることができます。しかし、都会はアスファルトですね。それから、暖をとるのだって、まきから何からその辺にたくさんあります。

ですから、こういう違いはあるのですが、強調していたことは、津波に侵されない高台の集落を指定して、とにかく人を1カ所に集めることが大事だということです。

会員

昨年10月に、青森県で、民生委員大会がありまして、そこに私も参加したのです。それから、帰りしなに、被災地に行ってみました。そうしたら、テレビとは全く違うのです。現実を見ますと、これが本当に現実かと思うくらい、テレビで見ると、実際に見ると、全く違うのです。それは痛感しました。まだ船が散乱していま

したし、車も山になっていました。

鴻巣講師

我々は、現場をガイドするわけですが、現場に来て話を聞いた方は、異口同音に、現場に来ないとわからないねと言います。これは共通しています。新聞やテレビで見たのとは全然違います。そして、みずからメモをしていかれます。被災地というのは、やはり現場主義なのですね。

会員

消防団の立場でお伺いしたいのですが、今回の地震は、冬が明けるくらいのときに起こりました。これが、例えば、冬期間の12月のあたりに起こったらどうするかというのは一番問題だと思います。そうすると、いろいろなものが寸断されて、電気も当然とまってしまいます。暖房もほとんどないわけです。そういうことを考えると、本当に恐ろしくなります。その辺について、何かお考えがありましたらお伺いしたいと思います。

鴻巣講師

現実的に経験して役に立ったのは、今、寒さという話がありましたね。貞観時代からの、三陸地方を襲った津波の記録があるのですが、私は、それを全部検証してみました。まず、季節でございますが、津波に関しては、なぜか寒い時期が多いのです。夏とか秋は1,000年のうちに数回しかないのです。ですから、津波ではなく、普通の災害も、寒いときがないとは言えないのです。

本当に身近な話ですが、私は、3月11日のころ、ストーブを部屋に置いていて、灯油も残っていたのです。これは、非常に助かりましたね。お湯を沸かせますし、いろいろ煮焼きもできます。

もう一つは、ごく当たり前の話ですが、ソーラーで、3月でまだ寒かったのですけれども、私はたまたま、1日前くらいに、ふろにいっぱい水をためていたのです。これは、非常に助かりました。水洗トイレが使えなかったですし、食器を洗うのにも非常に役に立ちました。汚いとか何とかと言ってられませんからね。ストーブは役に立ちますね。

会員

私どもは、北区災害防止協力会と言いまして、建設業者が災害に対して連携して対応するための組織ですが。

被害の話はすごく出てくるのですけれども、最初の震度6の地震のときに、どういう状態だったのか。我々も震度6は経験したことがありませんから、そのときは、津波が来るかどうかは別としても、どんな状況であったのかということをお教えいただきたいと思います。

鴻巣講師

まず、地震になったときの私の印象ですが、非常に長いのですね。実は、宮城県沖

地震が、この30年の間に99%の確率で来ると言われていまして、実際に2時40分に地震が来ました。最初は縦揺れで、その後少し落ちつくのかな、終わりかなと思っていたら、今度は、少しずつ横に揺れ出したのです。そして、今度は横揺れが大きくなったのです。これが、何と4分ぐらい続いたのです。全部で6分ぐらいですよ。そして、私たちは、すぐに、これが宮城県沖地震だなと思いました。

私は、そのときに、ファクスのやりとりをしていたのですが、窓から外を見たら、電線が意外とぴんと張っているにもかかわらず、縄跳び状態ですね。これはすごいなと思いました。その瞬間に、ライフラインはストップです。そして、津波が来るまで、大体50分以上は間があったのです。その間、全国でも有名になった24歳の遠藤未希さんという町職員、この方のアナウンスが始まったのです。最初は6メートルと言っていました。6メートルの津波が襲ってきます。全町民の皆さんは急いで高台に避難してくださいと。異常な潮の引き方だったのです。私は非常に印象に残っているのですけれども、6メートルのアナウンスが10メートルに変わるのです。しかし、彼女の声のトーンは変わらないのです。うら若い乙女ですから、普通だったら、絶叫に近くなったりするのではないかと思います。彼女のいるところは地上4メートルです。そこを襲った津波は15メートル以上ですからね。そして、彼女は死んでしまったのでわかりませんが、津波を襲ってきたところを見ていたかもしれません。そうしたら、なおのこと、声のトーンが変わるはずですが、淡々と、テープレコーダーに吹き込んだような言い方なのです。外のスピーカーから聞こえてくるのです。有線放送のラジオのようなものでも聞こえてくるのですが、最後まで聞こえたのはスピーカーです。また同じことを繰り返すのだなというふうに思ったのですが、淡々と、44回繰り返したのです。それが印象に残っています。

会員

津波の被害が大きいですが、地震で倒壊されたところもあったのでしょうか。

鴻巣講師

東日本大震災という名前がついておりますが、私どもは、正直に言いまして、この名称にも疑問を感じています。九十数%は水死でございます。それは、内陸部の方ではあったのでしょうか。全国的に有名なのは、長野県の栄村ですね。翌日の3月12日にかなりの被害を出しましたが、ほとんど水死ですよ。岩手大学の医学部の先生もおっしゃっていましたが、非常に現場主義ではない名前のつけ方だと。90%は津波でやられています。一部、壁が落ちたというところは何か所かありましたけれども。

会員

札幌の北区は、平地でございまして、日本海に面しておりますから、日本海で起こる津波はどれくらいの規模のものが考えられるのかわかりませんが、やはり、この地域で一番心配するのは地震なのです。地震になったときに、どのような対応策をとればいいのか。あるいは、津波が来ても、平地なところで、裏に山があるわけではございませんから、どこに避難すればいいのかと思うのです。地域の方のどなたかが先になって手を振って、私についてこいというふうに言われたのかどうか。我々の立場と

しては、自分の身を先に考えます。そして、自分の家内たちが下敷きになっていても、立场上、町内会の者だから助けに行くのだというくらいの気持ちを持っています。

3日間は、その地域において、自分でしのがなければならない。そして、公の救助を求めるには3日はかかりますと聞いておりますので、その辺のところの扱い方ですね。これは、規模といいますか、まちの関係もございましょうけれども、どうすればいいのかなというあたりを助言していただければありがたいと思います。

鴻巣講師

私も、現場での経験は、山里の団地なものですから、それ以外の海岸にいた方の行動というのは、また聞きでしかわからないのですね。日ごろの備えといっても、地震の恐ろしさというのは、これからどういう地震になっていくかということなのです。同じ地震ばかり来るわけではないですからね。そういう心がけを持たなければならないです。だからといって、毎日、びくびくしているのかという話もあります。昔、この地を襲った、人知の及ばない、考えられない地震が実際に起きているということを考えて、この次もこうかもしれない、それこそ想定ですね。想定できないものを想定するということですね。

渡邊所長

そろそろお時間となりました。まだまだ伺い足りないところもあると思いますけれども、これで終了させていただきたいと思います。

それでは、いま一度、鴻巣さんにお礼を申し上げます。

鴻巣さん、どうもありがとうございました。